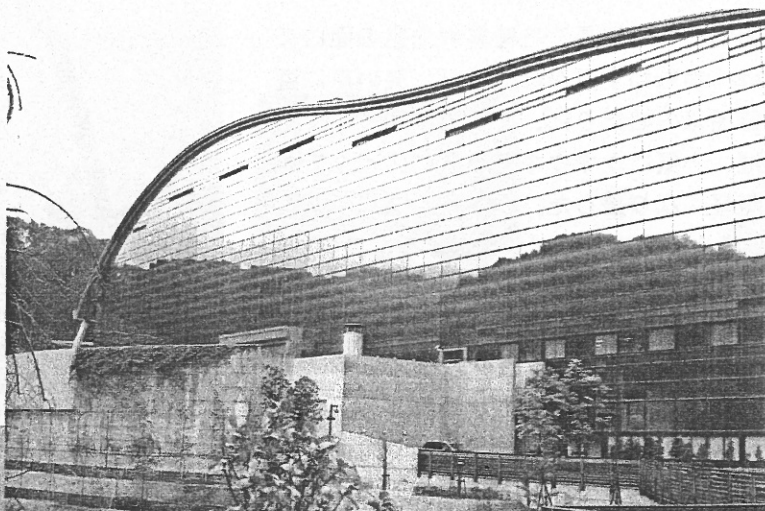


NPO JCP NEWS

NPO JCP
Japan Conservation Project

No. 16 2007. 6.27

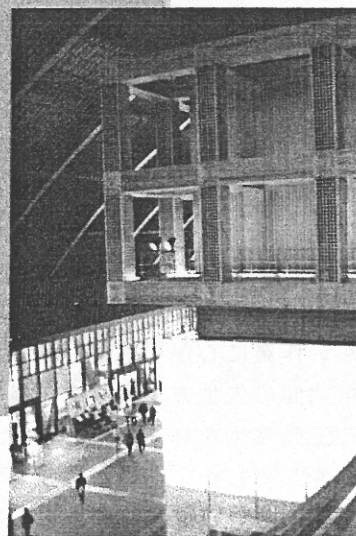
- ・九州国立博物館バックヤードと大宰府の文化財見学ツアー
- ・伏流水 日本における人材養成の現場から 東北芸術工科大学
- ・Sattellite Report
- ・JCP 事務局通信
- ・書籍紹介『世界遺産カルタ』



九州国立博物館外観



東北芸術工科大学



九州国立博物館

‘三輪館長と行く’九州国立博物館バックヤードと 大宰府の文化財見学ツアーに参加して

坂本久禰子（コスモ アート株式会社 取締役 学芸員）

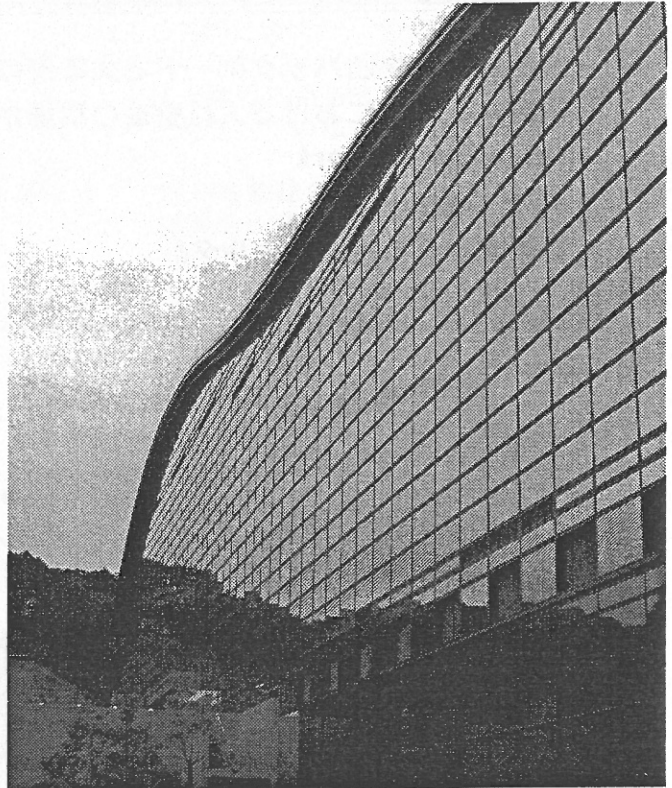
凛とした梅の花に包まれながら、九州国立博物館、大宰府を巡る機会に恵まれた私は本当に幸運でした。

九州国立博物館は、百年来の地元の熱意、大宰府天満宮の協力と御心のもと、博物館として歴史の香りする絶好の場所に立地、日本で四番目となる国立博物館にして、やっと出来た、待ちに待った、21世紀にふさわしい「生きている博物館」そのもの。子供のように胸わくわく！ ドキドキ！ させてくれるワンダーランドでした。

九州国立博物館 名物館長、三輪嘉六先生の面白く興味深い話には、おもわず顔がほころび、笑い声に溢れた和やかな雰囲気が始まりに、一人で参加し多少緊張していた私は、一気にウキウキモードにスイッチが切り替り、肩が軽くなりました。

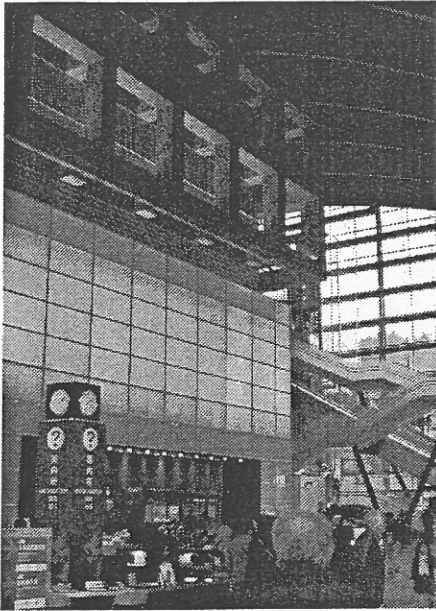
まず建物というより大きなオブジェのような博物館、全体が自然の青に溶け込んだ美しい鏡の壁面（中から外を見ると普通に見えるが、外から見ると全面鏡に見える）。コマーシャルで見たことがある方も多いのでは。やさしい曲線で作られた長方形の蒲鉾形。国際競技サイズのサッカー場が一面すっぽり入る大きさの迫力ある建物に思わず両手を広げ‘oh！！’と仰け反るポーズをしたくなる素晴らしさ。もちろん中身も三輪先生の言葉通り「学校より面白い！ 教科書より分かりやすい！ 楽しく学べる！ 空中ブランコ以外は何でもする？！」（ワオオ！ 確かに出来る、あの天井の木にロープをかけて……高さといい広さといい完璧！

気持ちいいだろうなあと私的つぶやき）なんと素敵な博物館なのではないでしょうか。お忙しい中、諸先生方に説明を頂きながらバックヤードを見学。科学の力と昔からの技、細かい作業に心から感動しました。夕食会では九州国立博物館の先生方、大宰府天満宮禰宜・味酒様と私たちで三輪先生のバースデーということできさやかなお祝いをしました。あいにくのぐずついた天候も気にならず、楽しい時間はあっという間に過ぎて行きました。翌日は、御先祖が菅原道真公にお仕えし守り通し、代々大宰府天満宮を守り続けておられる味酒様より説明を受け、ふっと歴史ロマンにタイムスリップ。遥か昔に思いを馳せ、そぼ降る雨が道真公の無念さ悲しみに感じられました。その後、地元の歴史

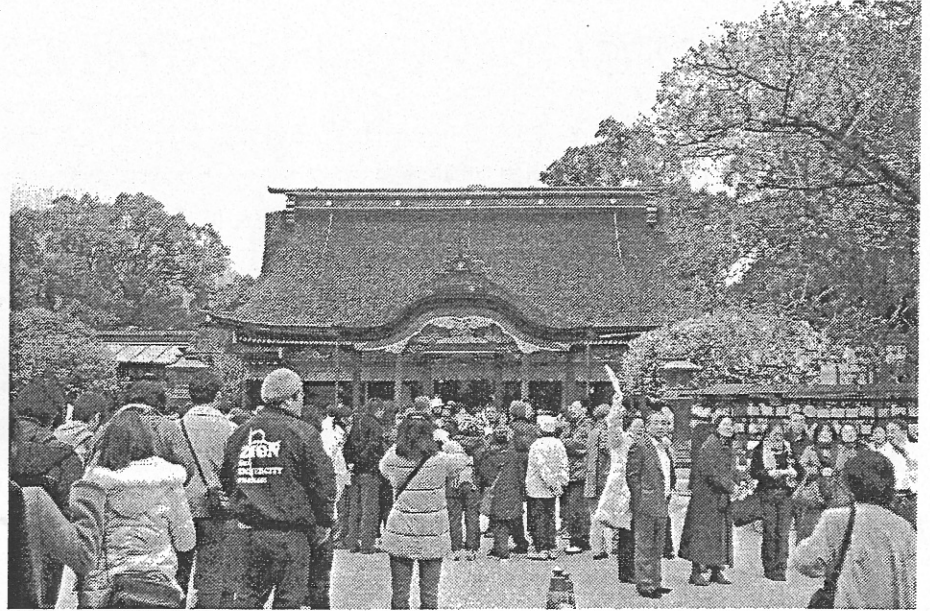


ボランティアの方より太宰府政庁等の説明を受け、午後金印のある福岡市博物館を見学し、楽しい時の手みやげをいっぱい持って、帰りの機上の人となりました。

横浜にあるFM局サルースで毎月一回私の担当する「学芸員坂本コーナー」の放送があるのですが、数日後早速、九州国立博物館の面白さ、文化財に関してトークしました。放送終了後より、リスナーの方々から質問や感想が寄せられ、想像以上の反応にディレクター・FM局の方々や私もびっくりしました。多くの質問が文化財に関する疑問、興味。中には専門的な内容もあり、一般の方々の意識の高さに驚かされました。日本の文化財のほとんど70%以上が伝世品であるのに対し、欧米諸国は土中古、出土品が多いことから、大英博物館、メトロポリタン美術館等訪ねてみると、文化財保護・修復に対する根本的な違いがあることが分かります。日本文化・技術の伝承は人間国宝を生み出しました。文化を理解し愛することは他を認め合うことであり、国際社会にあっては互いの風土や国土を愛し、人類の多くの遺産・文化財を次世代にちゃんと渡し続けることでもあります。私たちの担う責任は大きいと痛



九博の中には巨大な空間が。



太宰府天満宮本殿。道真公の墓所でもある。



大宰府天満宮 味酒禰宜のご案内で、光明禅寺を見学。

感じました。どんなことが出来るのか、何をしたら良いのか、多くの人々に文化財の大切さや興味を持ってもらえるのか、私なりに出来ることを始めようと毎月のFM放送や百貨店でのミュージアムアクセサリ販売の時々、講演会で、分かりやすく楽しい話題を提供して行こうと思いました。今回の旅で新しい友人も出来、思い出深い九州旅行となりました。最後に八木さん松本さんご苦労様でした。お二人の御心遣いありがとうございました。

感謝 坂本

謝辞: 今回のツアーでは、九州国立博物館 博物館科学課長 本田光子先生をはじめとして、同課 環境保全室長 今津節生先生、同研究員 鳥越俊行先生、展示課課長 赤司善彦先生、橋本雄先生、松川博一先生、館長秘書 尾崎ゆう様など、九州国立博物館の皆様の全面的バックアップを頂きました。また同館バックヤードでは、国宝修理装こう師連盟 九州支部 加藤章男様、(財)美術院 楠本彰一様、NPO法人文化財保存活用



太宰府天満宮は梅が七分咲きだった。

夕食は炭火焼きで三輪館長のお誕生日祝い。



観音寺本堂。

支援センターの森田レイ子様たちにご案内を頂きました。さらに太宰府天満宮禰宜 味酒安則様には忙しいお時間を割いて頂き、解説ならびにご案内をしていただきました。太宰府天満宮ガイドサービスの会解説員 桑原実秀様には、太宰府の史跡をガイドして頂きました。

ここにご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げ、重ねて御礼申し上げます。

三輪館長と行く

九州国立博物館バックヤードと大宰府の文化財見学ツアー

2007年2月17日～18日。‘三輪館長と行く’という副題とともに、かねてからの企画であった「九州国立博物館バックヤードと大宰府の文化財見学ツアー」が開催されました。

参加者はスタッフ含めて19名。遠くは盛岡から参加した方や、70代の3人連れで参加された方もあり、NPOならではの多彩な顔ぶれでした。あいにくの曇り空でしたが、天満宮の梅はちょうど見頃の七部咲き。かぐわしい香りを漂わせていました。

「通りゃんせ」の旅

‘九州国立博物館 バックヤードと大宰府の文化財見学ツアー’に参加して

谷 麻里（日本画家）

『一度恩師の故郷へ行ってみたい』……そこがどんな土地で、そこに建てられた九州国立博物館がどのようなものなのか……何か強く惹かれるものを感じてこのツアーに参加しました。

久しぶりの飛行機から降り立った福岡は雨模様で意外に寒い天気でした。

「そういえば、近くの海を寒流が通っているから冬は案外寒いと聞いたなあ」

ぼんやり回想している間にも、バスはだんだん山へ向かって走っていきます。

「九博って天神様の境内にあるんじゃないかって？」

と、思っている間に見えてきたのが青い屋根の‘威容’でした。

東京、京都、奈良の国立博物館とは違って現代建築だとは知っていましたが、何と、山の上とは……。

後で大宰府天満宮の禰宜、味酒（みさけ）様より先代が博物館を建てるために寄贈した土地と聞いて納得。

「なるほど‘境内’だ」では、天満宮から博物館までどうやってゆくの？ まさか階段？

いいえ、梅の花盛りの境内の脇に、エスカレーターがあったのです。

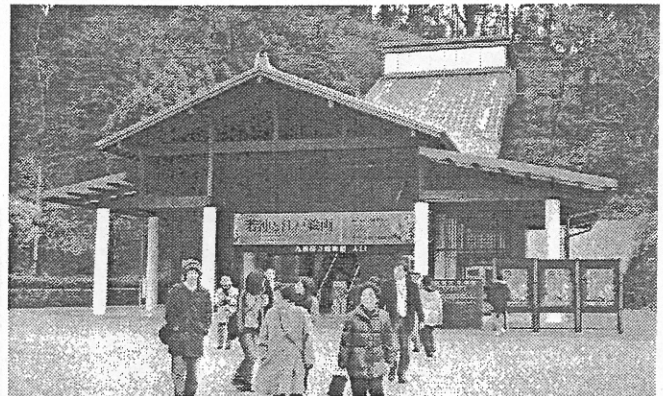
「まるで天神様の細道だ」と思ったのは私だけでしょうか？ その細道を沢山の人が通っていきます。

博物館の展示室は大盛況でした。硝子張りのホールで催し物があるときはもっとすごい人出だとか。

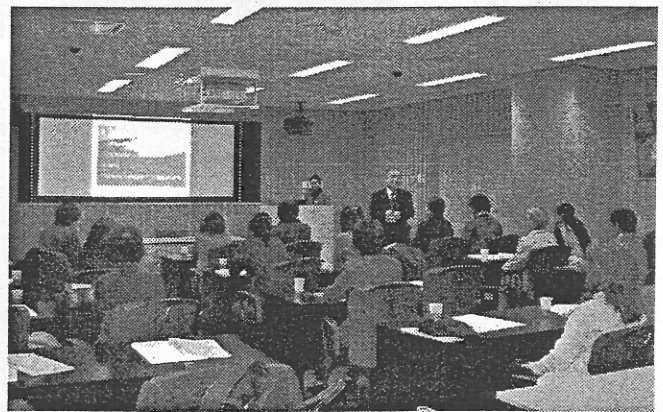
ハングルや中国語の説明、そして海にちなむ展示のなか、ひときわ‘匂う’部屋がありました。

盲導犬が座っている隣で海洋ルートで取引された品々が匂っていたのです。

香木、薬種、新しい木、縄、その他もろもろの清々しい匂い。



九州国立博物館へと続くエレベータ入り口。特別展として若冲と江戸絵画展が開催中だった。



三輪館長によるレクチャー。

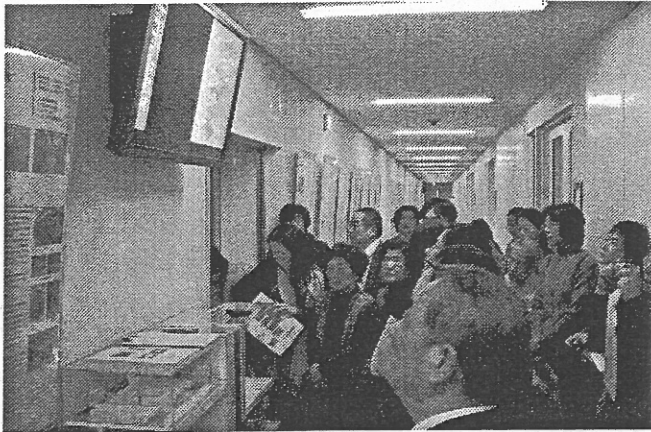
「ああ、ここは大陸に近いんだ」と、五感いっぱいに感じたのですが——それはまだ序の口だったのです。

さて、いよいよ時間となりバックヤードへ。展示室の賑やかさから一転して静謐の空間へ導かれました。

案内に従って館内を巡る目の前に現れたのは文化財を調査するための機器や装置、そして広大な収蔵庫。

「これからは、研究発表を聞いた時どんな機材でどのように調査したかが具体的に想像できるな」

それだけでも収穫、と思っていたところへ



三輪館長(手前)自らのご案内で、バックヤードを見学。



見学通路から倉庫内の様子を見ることが出来る。



ミュージアムショップには楽しいお土産が満載。



九博の今津先生から、各種分析機器の説明を受ける。

「普段はお見せしない修復現場もどうぞご覧下さい。今日、本当は担当者が休みなのですが出てきてもらっています」との三輪館長のご好意。しかし、幸運はそれだけではありませんでした。

修復されていた日本画のなかに、以前訪ねたチェコのナールステック博物館のものがあったのです。

さらに、見覚えのある拓本が眼に入りました。かつて大学で韓国人の先生から講義を受けた好太王碑……。

一瞬、ヨーロッパの古くほの暗い学芸員の研究室と韓国史の講義の思い出が交錯しました。

なんという巡り合わせでしょう。大陸の西と東の文化財が同じ場所で修復されているとは。

「これを目撃するために導かれてきたとしか思えない」そう確信してバックヤードに名残を惜しみました。

夕食会はお誕生日当日の三輪館長と代々天神様に仕える味酒氏、そして博物館の方々を囲んでの和やかなものでした。それぞれが色々な人生を持ち寄って一同に会し、話は尽きる事ありませんでした。

翌日は、味酒氏より菅原道真公と天満宮の由来や境内の解説をして戴き、後は地元の解説員の方が見所を

案内して下さいました。大宰府政庁を見て多賀城址を思い出し、西と東の果てを見た感慨に打たれました。

しかし、そのなかでも一番印象に残ったのは、天満宮の池にかかっている橋は‘過去’‘現在’‘未来’を表しているというお話でした。学ぶということは、天神様の細道をたどっていくようなものなのかもしれません。

最後に福岡市博物館で金印を見ました。倭の国から道真公の流転、そして九州国立博物館に至るまでの気の遠くなるような長い長い道のりに思いを馳せました。いつのまにか日は暮れ、機上から夜景を見た時にふと岡倉天心の言葉「亜細亜は一つなり」が心に浮かびました。茶道の恩師の故郷を後にしながら。

「新しい事を知るために来たつもりが、自分の過去と向き合う事になったな……。そして現在がある」

お蔭様で、あまりにも多くの事を体感させて戴きましたが、それは、多くの方々のご厚意の賜物です。

天神様の細道を「通りゃんせ」と導いてくださったJCPと九州国立博物館、そして大宰府天満宮と地元の皆様に深く感謝しております。有難うございました。

NPO JCP NEWS では、現在までに、海外における修復保存専門家の養成システムについて、現地の事情に詳しい方々によるレポートを掲載してまいりました。

※

振り返ってわが国の現状はどうでしょうか？

修復に関しては、日本では民間工房が人材の養成を肩代わりしてきた歴史があります。徒弟制というのもそのひとつの形です。教育機関における文化財保存修復教育は、欧米に比べ遅れを取っていると思われがちですが、現在では文化財保存修復科学をトレーニングするコースが設置されている教育機関は、大学22校、専門学校6校に登るそうです（『文化財保存学教育の40年 東京藝術大学大学院文化財保存学専攻編』）。

文化財関連コースを設置する大学は、東京藝術大学、奈良大学などを嚆矢としますが、1990年代に入ると、その数は飛躍的に増加します。生き残りをかけた大学の経営戦略の中で、新学科を設置して学生を確保しようという狙いがあり、その流れに乗った形とも言えます。しかし受け皿となる社会環境が整わないまま毎年学生

を世に送り出せば、ただでさえ狭き門の就職は、更に困難を極めてしまいます。また教授陣の不足も大きな問題です。

そんな状況でも学生は夢を持って毎年入学してきます。少ない陣容と大学の思惑の狭間で悪戦苦闘しつつ、情熱をもって後進を育てようとしている教員たち、困難を覚悟しても文化財関連の仕事に進みたいと願う学生たち。

彼らの能力を汲み上げ、社会の力にしていけるために、何をどのように解決していけばよいのでしょうか？

このシリーズでは、そんな課題を見据えつつ、教育現場の生の声をレポートしていきたいと思います。

※「世界の修復会は今」掲載バックナンバー

第1弾	韓国	No. 2	2002年 6月発行
第2弾	イギリス	No. 3	2002年11月発行
第3弾	アメリカ	No. 4	2003年 3月発行
第4弾	イタリア	No. 6	2003年 9月発行
第5弾	台湾	No. 7	2003年12月発行
第6弾	オランダ	No. 10	2005年 1月発行
第7弾	フランス①	No. 12	2006年 1月発行
第8弾	フランス②	No. 13	2006年 4月発行

第1弾

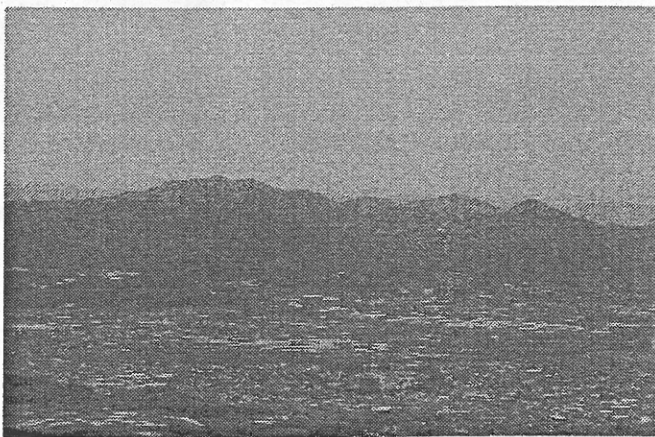
東北芸術工科大学

東北新幹線山形駅から東に向かって車で走ること約20分。東北芸術工科大学は背後になだらかな山を背負った風光明媚な環境に立地しています。

訪問したのは5月の連休明け、東北はまさに春たけなわのまぶしい季節でした。

同大学は1991年に設立されたまだ若い大学です。「芸術文化の理解と継承」をキャッチフレーズに掲げ、さらには地域社会に根ざして行こうという明確な志向性をもった大学です。京都にある京都造形芸術大学とは姉妹校とも言われますが、それぞれの地域的な特色を打ち出し、独自の校風を堅持しています。

同大学の学部は、芸術学部とデザイン工学部に大きく分かれ、芸術学部だけでも13の学科／コースを持っています。中でも文化財保存修復に関わるのは、芸術学部の中の美術史・文化財保存修復学科です。同学科に入ると、1、2年次は文化財の基本概念と美術史の両方を学びます。ここでふたつのコースが一緒になっているのは、まずは作品を洞察する心構えを学ばせるという意図があるそうです。3年次から美術史か文化財保存修復のいずれかのコースを選択することになり、後者は更に保存修復と保存科学に分かれ、大学院でそれぞれの専門性を高めると言うカリキュラム設定がなされています。保存修復のゼミとし



山形市内

て、東洋絵画修復 西洋絵画修復 立体作品保存修復があり、学生たちは実際に作品に触れて修復を体験することができます。

○文化財保存修復研究センター

そんな東北芸術工科大学に、全国初の大学付属文化財保存研究機関として「文化財保存修復研究センター」がオープンしたのは平成13年のことです。更に平成17年、文部科学省の私学助成を受け、翌年には工房や分析機器を備えたセンター独自の建物が新設されました。

このセンターの役割は、東北各地域の文化財資料の保存修復を研究受託しつつ、それらを教育目的に活用することで、大学／大学院の教育とリンクさせ、さらにはその成果を地域社会に還元して行こうというもので、まさに理想的な教育システムと言えます。



文化財保存修復研究センター(右)と本館(左)。

センターのセクションとしては、「デジタルアーカイブ部門」「歴史、考古学部門」「保存科学部門」「東洋絵画修復部門」「立体作品修復部門」の5つに分かれており、それぞれの専門分野の中で、例えば地域の美術館博物館などから調査を請け負ったり、実際の文化財修復を受託したりしています。

こうした事業に対応すべく、センターには東洋絵画修復アトリエ 西洋絵画修復アトリエ 立体作品修復アトリエなど各分野のアトリエがあり、それぞれが十分な広さと、修復道具、備品を備えています。特筆すべきは、東洋絵画修復アトリエと立体作品修復アトリエの床がフローリングの床暖房となっており、さらに空気を循環させる工夫がなされていて、寒い土地柄にもかかわらず、快適な室温と湿度を実現しているということです。特に立体作品修復アトリエは、床が重量の彫刻作品に耐えられるよう頑丈に作られて、しかも24時間の温湿度管理。もちろん溶剤のダクトも備えています。

分析機器室には、X線回折分析装置、X線分析計付き操作型電子顕微鏡、レーザー三次元計測装置、ガスクロマトグラフ、イオンクロマトグラフ、分光分析装置、携帯型蛍光X線装置など、公立の研究機関にも劣らない装置が備わっています。

X線撮影装置はデジタル型と旧来の現像型とを併用しており、それぞれの特質を生かして使い分けているとのこと。

さらには大型の真空凍結乾燥装置、樹脂含浸槽を導入しており、埋蔵文化財の保存処理にも対応する機能を有しています。こうした大型の装置を維持できる背景には、大学が自家発電を行って電気代を低く抑えているから、という説明にびっくり。エコにまで気を使っているんですね……。

考え抜かれた施設を持ち、実際に文化財を保存修復するプロセスを目の当たりにできる学生は、本当に恵まれていると言う



分析機器室

べきでしょう。

今回は、センター所属の張大石准教授に、センター設立の理念をお聞きしました。

○文化財保存修復研究センターの理念

Q:文化財保存修復コースを専攻して卒業しても、関連の職種に就職できることは極めて希です。この困難な状況の中で、大学は学生に何を教えるべきなのでしょう？

張先生:今の大学教育を一言で言うと、卵を産みっ放しにしている状態に似ています。卵がその後どうなるか、そこまで教員側が見届けることはできません。紆余曲折に富んだ社会生活の中で、あるいは他の分野の道を辿る必要もあるでしょう。現実にはほとんどの学生は文化財の保存と修復の専門家にはなれないわけです。そう考えた時、ひたすら保存修復専門家を目指す卵

だけを生み出すことが今の時代に合うのだろうか？あるいは、修復家とはこういうもの……という型を大学で作ってしまうことが良いことなのだろうか？という疑問がわいてきます。欧米の型を追い、先輩の作った道をひたすら踏襲すれば良いというものではないと私は考えます。

では、たった4年+αの期間で学生は何を学び、そして教員側は何を学生に与えるべきなのか？

この答えを模索するかたちで文化財保存修復研究センターは構想されたのです。文部科学省私立大学オープン・リサーチ・センター整備事業助成金申請時のテーマは「地域文化遺産の循環型保存・活用システムの総合的研究」でした。このテーマは、松田泰典センター長(教授・保存科学)等と共に長時間ディスカッションを重ね、自分たちの哲学をぶつけ合う中で、センターの理念として生み出されたものです。

文化財保存学は人間学並びに社会学ではないかと、私は考えます。

文化財の背後には、美術館博物館など所有者の関係だけでなく、たとえば不動産文化財ならその文化財が存在していた環境、景観、それらを包含する地域の風土や地元住民の関わり、そして地域を包含する国、さらに国境を越えた文化圏、最終的には地球があるように……文化財は、とてつもなく大きな環境と社会と人間構造に育まれたものなのです。ですから、「修復する」ということは、単に「依頼され」→「修復し」→「所有者に返却する」といった一方向的な作業ではなく、その後どのように活用し、どういう所に還元していくのか、さらには伝統文化を如何に継承し創造していくのかといった多角的かつ巨視的な保存の視点が重要だと思います。従来の保存修復はどちらかというとミクロ的な概念だったとも考えられるでしょう(図参照)。

センターでは、きちんとした保存修復は勿論、修復した文化財を小学生の課外学習への活用を行ったり、大人に対しても社会学習の場を提供したり、眠っている地域文化遺産の再発見・再認識活動を展開したり、地域の文化にフィードバックすることを常に意識しています。そうすることで、地域の魅力、すなわち「文化力」が具体化、視覚化され、地元住民の自信と愛着につながっていきます。そのなかから、自然に文化財保存の概念が根付くのではないのでしょうか。例えば、良い畑の土壌環境から良い苗が育ち、恵みがもたらされることですね。従来の文化財保存の概念では良い土壌環境をつくる、すなわち「耕す」ことをあまり考えていませんでした。耕もしないのに文化財保存の概念が社会に根付くはずがありません。この構図を現実化するために、「地域文化遺産の循環型保存／活用システム」がどうしても必要だったわけです。

今までの大学教育は、局部の専門領域しか見ていないのが現状だと思います。それでは卵を産んでも孵化できない、死んだ卵になってしまう可能性が高い。これからは、専門領域を超えて、背後にある地域社会を掬い取りながら、潜在している文化的価値を研究し分析する能力を備える必要があります。センターでは、ひとつの建物の中に「東洋絵画」「西洋絵画」「立体」「埋蔵文化財」「歴史・考古学」など様々な領域のラボを併設し、異なる学部が交流し、裾の広い知見を得ることができるようにしています。

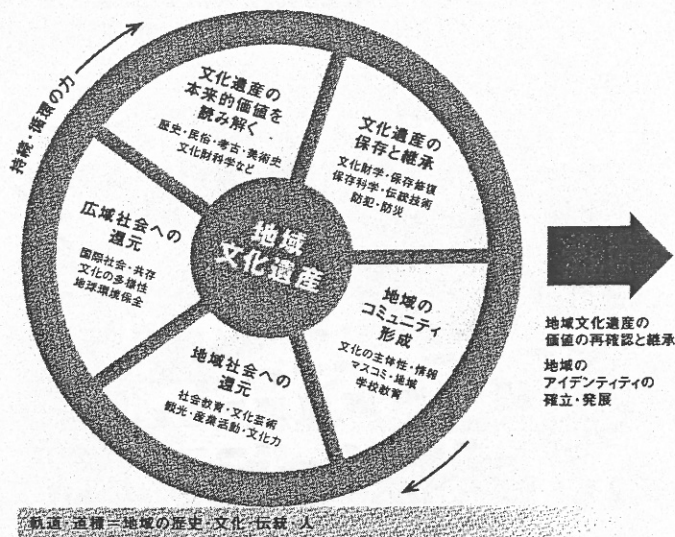


図 地域文化遺産循環型保存・活用システムの概念図

今のところ大学は卵を生み出すことしかできません。孵化率も当然ながら低いです。それでは、今できることは何か。他の研究機関や組織ではできないこと。すなわち、教育を通してできることは、学生一人ひとりの生き方、社会と文化に対する確固たる姿勢に関わる哲学＝信念を、巨視的な文化財保存の観点から学ばせることです。そういった意味で、今切実に必要なのはいわゆる保存哲学なのではないでしょうか。充実した機材は学生一人ひとりにとって見れば、あくまでも一時的に必要なツールでしかありません。しかし、哲学は一生です。信念と確信をもつ卵こそ、長い時間をかけてでもきっと孵化することでしょう。哲学の教育とは、列車が走るレールを敷く作業だと私は考えています。レールを敷かないまま、そして向う先が定まらないまま、立派な車両だけを造っても意味がないのです。

卒業後文化財保存修復専門家になるとは限らなくても、大学時代に培った文化に対する哲学を、あらゆる分野に生かしていけるような人間を育てたいのだ、と張先生は言っているように思います。

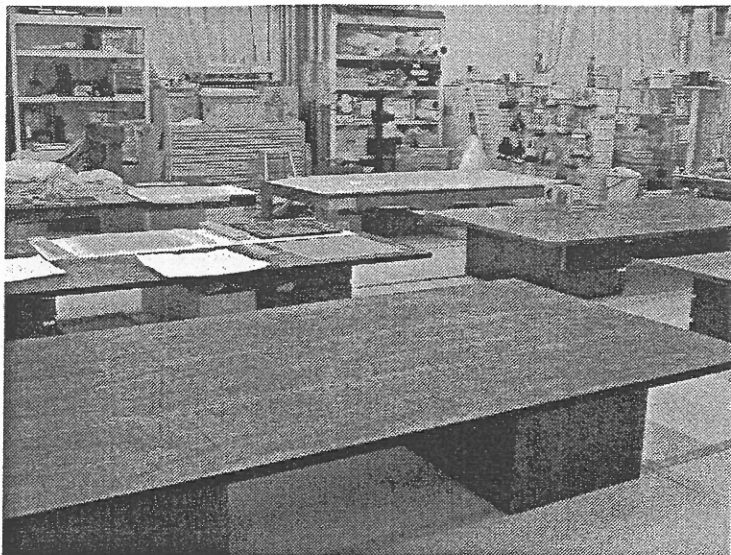
張先生の研究対象は山形県内に点在する石鳥居。山形には山岳信仰を背景に平安から明治期にかけて独特の容姿をもった石の鳥居が各所に建てられました。先生は材質としての石の保存に取り組みむとともに景観を形作る大切な要素として鳥居の歴史的・文化的価値を掘り起こし地域に還元しようと努力しています。

韓国出身の張先生の視線は、最終的には東アジアというフィールドに向けられているように見えます。その一方で、山形と言う地域をこよなく愛し、地域と世界とのつながりを見据えつつ、地に付いた研究活動をしているようにお見受けしました。

張先生をはじめとした、センターの教員の皆様の情熱が、学生に伝わるよう願ってやみません。

○事例編：立体作品修復室

立体作品修復室を訪れた時、ちょうどある地方自治体から受託した県指定の仏像を修復しているとことでした。田川新一朗研究員の指導監督のもとで、3名の大学院生が実際に作業をし



文化財保存修復研究センター 東洋絵画修復アトリエ



山形県の山岳信仰を物語る石鳥居

ていました。

Q:センターの修復事業受託方式は、民間工房と違いがあるのでしょうか？

田川研究員:全く同じです。私たちも見積書を提出し、合い見積もりの結果受託します。センターのラボは独立採算制なので、資金は自分たちで調達しなければなりません。正当に見積りをして、正当な競争の上で受注をします。ただし、受注の際、研究資料として論文などに発表する自由をお願いします。それを嫌がる所有者は、今のところあまりありません。

Q:研究教材として提供するのだから無料あるいは安くしてくれ、あるいは当然安いだろうと考える依頼者がいるのではないのでしょうか？

田川研究員:そうした依頼はなぜこれだけの費用がかかるのか説明します。モノを守るといのは本来所有者がすべきことです。それを任せるのですから当然対価は頂きます。

Q:作業をさせる学生に対しては、何か選考を行っているのでしょうか？

田川研究員:大学院生以上に限っています。これは授業とは別です。やる気のある学生でなければ受け入れません。当然修復費からアルバイト料も払っています。そうでなければ責任を持たせられませんから。もちろん教授や私が指導監督はするわけですが、同じ部屋に居るからと言ってずっと見ているわけにも行きません。ある程度技量を見極め、信頼してやらせるより他はないでしょう。学生と先生が同じ土壌で作業すること、プロの作業を見せることが大切だと思っています。

田川さんと話をしていると、センター運営の厳しさも伝わってきます。しかしこうした経済活動を実地に見せることこそ、実は修復技術者育成にとって最も効果的な訓練となるように思います。

○当世学生気質

では同校の教育プログラムを学生はどのように感じているのでしょうか？

取材中に2、3の学生と言葉を交わす機会もありましたが、

短時間の中で本音を聞くまでには至りませんでした。しかし大学生活を屈託なく「楽しい」と答える笑顔には、美しい自然の中でのびのびと学んでいる様子が伺え、微笑ましくなりました。

ゼミの授業にも飛び入り参加させていただきました。学部の保存修復コースのゼミで、学生にギャラリー訪問を課し、そのギャラリーに関する考察を発表する形式でした。随所に先生の鋭い指摘が入り、答えを促していきます。それと同時に、「時間中に1人1回は必ず質問すること」と檄を飛ばす先生ですが、やはり指されなければ答えない人が多いようです。そんな学生たちにもどかしさを隠せない先生のようにありますが、見方を変えれば、行儀の良い学生が多いということではないでしょうか。

○番外編—昨今学生気質—

でも私が見たのはほんの表面に過ぎません。最近の大学では父母の面談があるそうです。

父母……？面談……？入学式でさえ親はついてこないものと思っていた筆者にとっては少なからぬカルチャーショック。しかし最近では、単位を落として留年する学生の親が、なぜ卒業させないのか、と大学にねじ込むケースもあるとやら……。さらにナイーブな年代だけに心の病を抱えてしまう学生も多く、教員が人生相談に乗らなければならないとのこと。不登校になった学生のため、メールを打ったり電話をしたり、両親に連絡したり……という話を聞くと、大学のことは思えなくなります。

昨今の少子化は大学経営にも深刻な影響を与えており、いまや学生は大学にとっては「お客様」。彼らを粗略に扱うことはユメユメできません。そのような扱いが学生にとってよいことなのか、悪いことなのか……と考える以前に、そうせざるを得ない現実が教員の前に立ちはだかっています。「言葉の使い方を知らない」「時間を守らない」と嘆きつつも手取り足取り面倒を見る大学教員に感嘆する一方で、それが当たり前ではなく、人生の中でとても特殊な時間であると、学生が感じてくれることを願って止みません。卒業後、卵を孵化させるもさせないも、それはすべて自分次第なのですから。(了)

(レポーター／文責：八木三香)

水中文化遺産WGの発足に際し

荒木伸介 (NPO 文化財保存支援機構理事/水中文化遺産WG リーダー)

日本は島国であり、海洋国だと思われている。しかし、不思議なことに、実態はまったく海に関心のない国家 国民であることはほとんど理解されていない。

平成12年3月に、文化庁から「遺跡保存法の検討—水中遺跡—」が刊行されている。この中で、水中遺跡の有無についてのアンケート調査の結果があり、全国で379の市町村が有りとは回答している。しかし、専門家の間では存在が知られているところでも「無」と回答している市町村もある。実際には500を超える水中遺跡が存在すると推定できる。この内、実際に発掘調査などが行われているのは、僅か5ヶ所に過ぎない。この内の鷹島海底遺跡から引き揚げられた遺物の保存処理などに関

し、NPO JCPは平成17年度から協力している。さらに今年度からは伊豆西南海岸沖海底遺跡(沈船)の調査にも協力することになった。

WGは、引き揚げ遺物だけではなく、水中遺跡の調査・保存についても考え、寄与して行きたいと思う。現在、この分野においては韓国、中国は勿論のこと東南アジア各国の取り組みは目覚ましいものがあり、日本はまさに後進国になってしまっている。

今後の活動は、海を理解し愛する心を育み、海事思想の発展にも寄与できるものと確信している。

防災支援WGのご紹介

尾立和則 (NPO 文化財保存支援機構維持会員/防災支援WG リーダー)

防災支援WGの活動目的は、防災対策への助言および被災文化財の保存 保全活動を支援することとしております。実際の活動は香川県観音寺市郷土資料館の被災文化財救援活動(平成16年度)を契機に開始しました。その折には現地作業に参加してもらえ、会員を募り、救援活動を行い、その内容については本会HPにて報告をしております。是非ご覧ください。

国内には同様の活動を行っている文化財系、歴史学系、美術館 博物館、文書館 資料館、図書館関係の団体が存在しており、それら各団体との連携も行っております。災害発生後は、上述した各団体へ被災者からの問い合わせがありますが、その対応は各団体の活動内容により異なるのが現状です。本WGでは今後も現地作業も含め、被害の予防または減らすために必要なノウハウを蓄積し、外に向かって発信していくことを考えています。

今年度は観音寺市での作業時に実施した様々な処置技術や技

術支援チームとしてのノウハウを整理することを考えております。そこで本WGは会員の皆様から、災害あるいは事故により水損した紙資料の乾燥作業についての体験談または情報を募集いたします。情報内容は具体的な乾燥作業方法といったものでなくても結構です。紙資料の濡れた時の状態が乾燥後にどのように変化したか、取り扱い上または保管上どんな不都合が出たか、といったことについての情報等をお待ちします。集まった情報はWGが整理し、適宜皆様にお知らせしたいと考えております(具体的な被災場所等は非公開を厳守します)。

今後も会員の皆様と一緒に、被災地での支援活動や文化財全般に適応できる防災ノウハウを蓄積してまいります。今回募集しました乾燥作業へのご意見や情報、および今後の活動へのご質問は下記のメールアドレスまでお寄せください。

メールアドレス oryul@sb3.so-net.ne.jp

WG長、尾立和則(おりゅう かずのり) まで

JCP事務局通信

I. 新理事のご紹介

平成19年度定例総会におきまして、新たに荒木伸介氏、澤田正昭氏2名の理事が選出されました。荒木先生は水中考古学、沢田先生は保存科学の世界で大変活躍されています。両先生の参加によって、JCPの活動に一層の広がりができ、あらゆる文化遺産保護活動を支援できるような団体として成長していきたいと願っています。

II. 学生会員枠の新設について

同総会において、従来の会員種別に加え、新たに学生会員枠を設置することが決定しました。人材の養成はJCPの大事なミッションのひとつですが、最近学生側からも体験学習の場などとして期待が寄せられています。こうした要望に答え、今回下記のように定款ならびに会則を改定いたしました。

学生会員：原則として大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会

する個人。

会費：学生会員；年額3,000円

今後大勢の学生が入会し、機構に若い息吹を吹き込んでくれることを期待しています。

III. 韓国文化遺産スタディツアー(北中部編)のご案内

日本と地理的、歴史的、文化的に最も関係の深い国「韓国」の文化遺産とその保護状況を知る旅です。現在韓国の文化遺産の保存研究と若手研究者の養成を精力的に行っている沢田正昭先生、韓国出身の張先生、石造文化財保存の専門家の西浦先生が同行、韓国の諸先生を含めた専門家のレクチャーを受けつつ見学します。

※詳細は、同封のチラシをご覧ください。参加者多数が見込めますので、同封の申し込み用紙をご利用の上、お早目にお申し込みくださいませ。

Ⅳ. パンフレット製作基金ご寄付のお願い

機構の活動を内外に紹介するため、パンフレットの製作が急務となっています。その資金として、協賛して下さる方にご寄附をお願いしております。ご寄附いただいた方は、パンフレットにお名前を記載させていただきます（希望者のみ）。

1口 2,000円

郵便振替口座 00120-4-10545

NPO JCP

※1口でも2口でもけっこうです。

皆様の暖かいお志をお待ちしております。

Ⅴ. 聖母の保存 修復シンポジウム「海を渡った黒い聖母」～フランスから鶴岡へ～

のお知らせ

日 時：平成19年7月14日12:00～16:30

場 所：東北芸術工科大学本館4階410講義室

内 容：明治36年に鶴岡カトリック教会に北フランス デリヴァンド修道院から寄贈された「黒い聖母」像（彩色木彫）の修復報告と講演

入場料：無料

申し込み方法：氏名 所属を明記して、下記へ

〒990-9530 山形県山形市上桜田3-4-5

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター

E-Mail: Ficcp@aga.tuad.ac.jp

TEL: 023-627-2204 FAX: 023-627-2303

Ⅵ. ご寄附をありがとうございました。

ラリス株式会社 代表取締役社長 松岡 久美子様

株式会社 パレット 長谷川雅啓様

株式会社 明治クリックス 吉川博幸様

佐藤 隆明様

三浦 定俊様

○18年度「新・芸能人の多彩な美術展」報告

去年からJCPが共催している「新・芸能人の多彩な美術展」は、憲政会館を皮切りに12月まで7箇所で開催され、実行委員会事務局となっているラリス株式会社の多大な努力により、大勢の観客を動員することができました。終了後、機構に多額のご寄附を頂きました。

展覧会に出品して下さった政治家、芸能人の皆様、チャリティーボックスにご寄附くださった市民の皆様、後援いただいた各団体に厚く御礼申し上げます。ご寄附いただきましたチャリティー金は積み立てて、文化遺産の保護支援に活用したいと思っております。今後とも、「新・芸能人の多彩な美術展」にご支援ご賛同賜りますよう、お願い申し上げます。

書籍紹介

「世界遺産カルタ」

筑波大学大学院 世界遺産専攻
世界遺産カルタ制作チーム 制作
金田千秋 監修
虹インターナショナル株式会社 発行
2006年12月20日初版発行
2007年2月3日 改訂版第1刷発行
定価 2,500円＋税

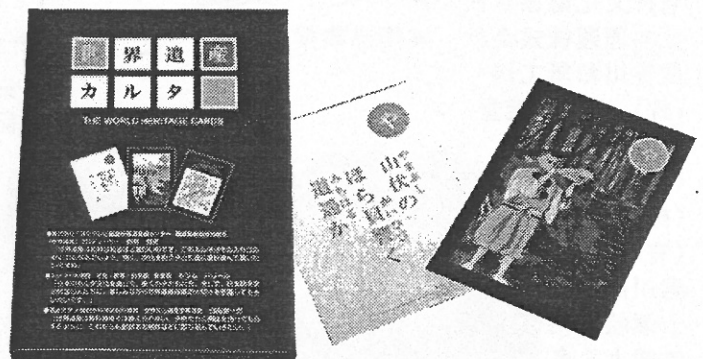
このカルタは、子供たちが楽しく遊びながら世界遺産を学んでいくツールとして、筑波大学大学院 世界遺産専攻の院生たちが中心となって制作された。

筑波大学大学院芸術研究科に、世界遺産を学問として研究する世界遺産専攻（修士課程）が誕生したのが2004年4月。2006年には博士課程も併設された。その研究活動の一環として「多くの人々にまず世界遺産とは何かを知ってもらいたい」との思いからカルタ作りが始まった。まず2005年に1期生が制作を開始し、2期生たちが引き継いで約3年をかけて完成させた。元々一部の教育機関等への配布を目的として500部が作られたものであるが、各方面からの大きな反響を得て出版されることとなった。

日本の13件と、世界の代表的な遺産の中から35件を選択、あいうえお46札と読み句のないおまけ2枚の全48札を作った。絵は筑波大学芸術専攻の学生を中心に有志を募り、世界遺産専攻の院生自らも描いた。各遺産の解説はあえて子供向きにせず、学問的に論述されている。カルタ遊びだけで終わってしまう場合が多い他の教材用カルタとは、一線を画す編集方針を採っており、それがこのカルタが成功した要因であると思う。一例を挙げてみると、

「歴史ある 唐を学んで 町づくり（古都奈良の文化財）」

「古都奈良の都である平城京は、唐とその都長安を手本にして古代律令国家を形成し、710年から74年栄えました。「奈良の大仏」として親しまれている盧舎那仏坐像のある東大寺は、現存する木造建築としては世界最大の規模を誇ります。限られた地域内に木造建造物が多数集まっている例は世界的にも珍しく、寺院と景観を含む8つの遺産が登録されています。」



これを読むと、このカルタの目的が子供たちだけではなく、教員も一緒に学べるものであることが分かる。その他、所在地、遺産リストへの登録年、登録基準が記され、簡易なカード型データベースとしても使用できる。登録基準は文化遺産を黄色、自然遺産を緑、複合遺産を赤として色分けされており、読み札、絵札、解説文共に各別で区別されていて、非常に分かりやすい作りである。

一つ難を言うと、元々教材用として作られているため、ある程度、教室くらいの広さを必要とするところであろうか。少なくともテーブルの上で遊べる大きさではない。別のカードゲームとしての遊び方がありそうなので、各々が創意工夫すると楽しいと思う。かなり高度な遊び方も出来そうだ。

ともあれ、この労作が評価され、世界遺産への関心が広まることは喜ばしいことだと思う。興味がある方はぜひ、手に取っていただきたい。

このカルタは3,000部の自費出版で、5月から直販している。問い合わせは虹インターナショナル株式会社、もしくは専用ホームページまで。

虹インターナショナル株式会社

URL: <http://www.niji-international.com/>

メールアドレス: info@niji-international.com

電話 ファックス: 048-941-8585

世界遺産カルタ

URL: <http://www.heritage-japan.info/index.html>

(R.S)

ご入会ありがとうございました。
(平成19年6月27日現在入会者数)

- 理事 6名
- 維持会員 11名
- 登録会員 167名
- 一般会員 98名
- 学生会員 2名
- 評議員 1名
- 専門評価委員 1名
- 賛助会員 31件

(株)宇佐美松鶴堂

(株)岡墨光堂

(株)和蘭画房

桂文化財修理工房

(財)元興寺文化財研究所

(株)京都科学

京都造形芸術大学 歴史遺産研究センター

共和コンクリート(株)

國富(株)長崎営業所

(有)黒田工房

(株)芸匠

(株)光影堂

有限責任中間法人 国宝修理装こう師連盟

(株)坂田墨珠堂

(株)修美

宗教法人 正法院

靖斎文化財保存研究所

日本通運株式会社 美術品事業部

長谷川和紙工房

(株)半田九清堂

百元 節

(株)フレンドトラベル

(株)文化財保存

(有)文化財修復技術研究所

溝川商店

山領絵画修復工房

他個人5名

(アイウエオ順 敬称略)

NPO JCP の活動に

参加してみませんか?

- 登録会員: 年会費 7,000 円
文化財保存に関わる専門的スキルを持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。
- 一般会員: 年会費 5,000 円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。
- 賛助会員: 年会費 一口50,000 円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。
- 学生会員: 年会費 3,000 円
大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

会員特典 季刊情報誌の送付
講演会 / 研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記ファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。お返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL. 03-6770-1682 FAX. 03-6770-1683

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL: www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・郵便振替 00120-4-10545 NPO JCP

・三菱東京UFJ銀行 四谷三丁目支店

普通預金 3960340

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

理事 三輪嘉六

・みずほ銀行 根津支店

普通預金 1727893

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

編集後記

●いったい、梅雨はどこへ行ったやら。先日の文化財保存修復学会の総会でも、静岡おでんを食べるはずが屋上ビヤガーデンになってしまいました。この暑さの中、700名を超える人たちが集まったそうで、皆様ご苦労様でした。中でも今回目立ったのは学生の参加者の多さでした。少ない小遣いの中をやりくりして参加する姿勢に、マンパワーは意外に身近にあるのではと考えた次第です。(嶋)

●念願の学生会員枠が設定され、事務局にも最近2名のインターンの学生さんが来てくれるようになりました。お蔭様で事務局の平均年齢が下がって嬉しいです。なんだかんだ言っても若者は捨てたモンじゃありません。そんな彼らの潜在能力を「伏流水」という言葉に表してみました。今後全国の大学を取材して回る所存です。応援してください。(M.Y.)

NPO JCP NEWS

第16号

2007年6月27日発行

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

〒110-0008

台東区池之端4-14-8 ビューハイツ池之端103号

TEL: 03-6770-1682 FAX: 03-6770-1683

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL: www.jcpnpo.org

〈理事〉

三輪 嘉六 (理事長)

大林 賢太郎 (副理事長) 西浦 忠輝 (副理事長)

伊原 恵司 白井 久明 増澤 文武

荒木伸介 (7月1日より) 澤田正昭 (7月1日より)

〈本部事務局〉

八木 三香 (事務局長) 松本 洋子 千葉麻由子

〈関西支部事務局〉

山岡 寛 (事務局長) 加藤亜沙子

〈編集協力〉 嶋根 隆一 (伝世舎)